



BHUTAN

学校名：世田谷区立給田小学校

氏名：荒川 妙子

[担当教科：小学校全科]

●実践教科等：道徳

●時間数：3時間

●対象：小学4年生

●対象人数：33人

〔1〕単元名

「幸せ」って何だろう？～ブータンを通して考える～

〔2〕単元の目的/目標（ESDの能力・態度）

- ・ブータンの文化や生活を知ることを通して、異文化への興味・関心を高める。（進んで参加する態度）
- ・「幸せ」に必要なものを考えていく中で、多様な価値観に気付く。（多面的・総合的に考える力）
- ・世界で活躍する日本人について知ること、異文化共存の大切さや人のために行動することの価値について考える。（他者と協力する態度）
- ・自分の考えや気持ちを人に伝える力を高める。（コミュニケーションを行う力）

〔3〕ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性
公平性	連携性	責任性

- ・日本とブータンの文化や生活、価値観の違いに気付く。（多様性）
- ・日本とブータンのつながりに気付く。（連携性）
- ・「物質的豊かさ」の有限性について考える。（有限性）

〔4〕単元の構成

時限	本時のねらい、テーマ	学習活動・学習内容	使用教材	評価の 観点と方法
1	【幸せって何だろう？】 ・「幸せ」に必要なものを考える。	・「幸せ」についてのアンケートを実施する。 ・幸せに必要なものを考え、意見を共有し、ウェビングマップにまとめる。 ・幸せな国に必要なものを話し合う。	・アンケート用紙 ・ウェビングマップ	・自分の「幸せ」に対する考え方を確認することができたか。 （発言・ワークシート）
2	【ブータンってどんな国？】 ・ブータンについて知り、異文化に興味をもつ。 ・ブータンの人々の幸せのとらえ方について考える。	・クイズなどを通して、ブータンの文化や生活について知る。 ・「幸せの国」に抱いた自分のイメージと実際を照らし合わせて考える。	・パワーポイント ・ワークシート ・民族衣装「キラ」	・異文化に興味・関心をもつことができたか。 ・幸せのとらえ方の多様性に気づき、自分の考えを振り返ることができたか。 （発言・ワークシート）
3	【世界で活躍する日本人について知ろう】 ・日本とブータンの深いつながりについて知り、国際協力の大切さに気付く。 ・人のために行動することの価値について考える。	・日本とブータンには深いつながりがあることを知る。 ・青年海外協力隊の姿を通して、人のために行動することの価値について考える。	・道徳教材「ブータンに日本の農業を」 ・パワーポイント ・青年海外協力隊のインタビュー映像	・国際協力の大切さに気付いているか。 ・自分の「幸せ」に対する考えを再考しているか。 （発言・ワークシート）

【5】授業の詳細

1時限目：【幸せって何だろう？】

まず、自分たちが「幸せ」をどのように捉えているかを知るために、アンケートを行った。

- ① 今、「幸せ」だと感じているか。（「幸せ・まあまあ幸せ・あまり幸せではない・幸せではない」の四択）
- ② それは、なぜか。（記述）

以上2点についてワークシートに記入させた。記入した内容について特に全体で取り上げることはせず、児童が自分自身の「幸せの捉え方」を意識化できるようにした。

次に、「幸せ」から連想することを一人一人ワークシートに書き出していった。その後、書き出したことをクラスで共有した。多様な意見を一枚のウェビングマップにまとめる中で、幸せを感じるための要素には様々なものがあることに児童は気付いていった。



ココがポイント！

まず、「幸せ」について意識化させることが大切である。アンケートやウェビングマップを作成し話し合うことで、「幸せ」についてのイメージを十分にたてさせる。これがこの先の話し合いの土台となっていく。一人一人の考えを尊重し、様々な捉え方があることを全体で確認する。

写真1

幸せから連想するものを出し合って作ったウェビングマップ

その後、「幸せの国」と呼ばれている国があることを知らせた。児童は「そんな国ってあるの？」「どこの国かな。」と、興味津々であった。「どんな国だと思う？」と問うと、意見が様々出た。そこで、4、5人の班で幸せの国とはどのような国か話し合うことにした。「幸せの国」に必要なと思うものを一人一人付箋に書き出し、話し合いながら班ごとその付箋を仲間分けした。ウェビングマップに出た幸せの要素を参考にしながら、みんなが幸せだと感じるために必要なものは何か考えていったのである。

班での話し合いの様子を聞いていくと、多くの班から共通して「豊かさ」という言葉が挙がった。「豊かさってどういうこと？」と問うと、思いやりややさしさなどの精神的豊かさのことだという意見と、土地や食べ物、家などの物質的豊かさだという意見とが出た。途中どちらが重要かという話題になり意見が対立する場面もあった。児童が「幸せとは何か」について課題意識をもつことができ、話し合いは白熱した。この時間にその結論を出すことはしなかったが、「幸せの国」というくらいだから精神的にも物質的にも豊かで、全てがそろっている極楽のような国だろう、という話になっていった。そして、幸せの国について知りたいという意欲を高めることができた。

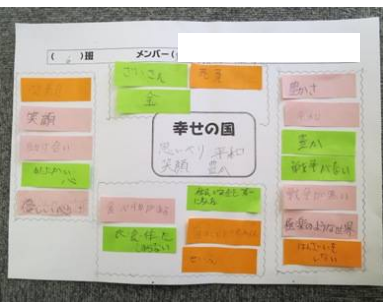
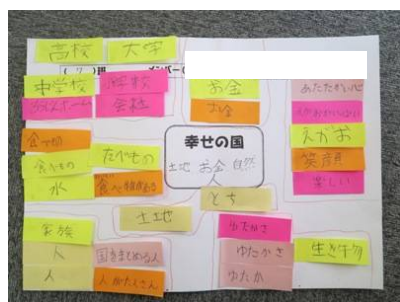


写真2 幸せの国に必要なだと思うものを話し合い、班ごとに付箋紙を整理したもの例

全ての班のまとめを黒板に貼り出し、共通するところや相違点なども話し合っていた。まとめ方も班によって様々である。

2時限目：【ブータンってどんな国？】

前時に考えた内容を確認した後、幸せの国として知られている国はブータンであったことを伝えた。そして、ブータンとはどんな国なのかをクイズ形式で知らせていった。（※添付1参照）教師が海外研修で経験したエピソードなども織り交ぜて、ブータンの人々の様子がイメージできるようにした。

ブータンの国の基礎知識からユニークな点、日本との違いなどを次々と提示すると、児童は大きな反応を示しながら、ブータンの国について理解していった。



.....
ココがポイント！
.....
ブータンのイメージを掴みやすくするため、パワーポイントを用いて写真を効果的に提示したり民族衣装である「キラ」を着て登場したりするなど工夫した。クイズは選択問題を取り入れたり、人口や面積などの数値は身近な数値と比較できたりするようにするとわかりやすくなる。
.....

写真3

大型テレビを使用して写真を提示している様子

ブータンのことについて様々知ったあと、ブータンは幸せの国として知られていることを再度確認し、2枚の写真を見てどちらがブータンか当てるクイズを行った。例えば、最新式水洗トイレと自分で水を汲んで流すトイレ、全自動食器洗い機と食器を手洗する少女の写真を見せ、どちらが幸せの国ブータンの写真を当てるのである。一見貧しいように見える写真の方がブータンであることを知り、児童は驚きを隠せない様子であった。「幸せの国というくらいだから、もっと裕福な国なのかと思った。」「都会みたいなのかなのかと思った。」と、自分がもっていた「幸せの国」のイメージと現実とのギャップにとまどっていた。そこで、「どうしてブータンの人々は幸せだと感じているのだろう。」と問いかけた。児童は思い思いに考えをワークシートに書いた。考える中で児童は生活や文化の違いが価値観の違いに繋がっていること、物質的豊かさだけが幸せなのではなく精神的豊かさがとても重要であることなどに気付いていった。

【児童の感想より抜粋】

- ぼくは、ブータンのことを知って驚きました。豪華だったりピカピカだったりはないけれど、友達や家族みんなでごはんを食ったりしていて、心があたたかで思いやりがあるから幸せなんだと思いました。それから、いろいろなことをありがたいと感じる「ありがたいの気持ち」をもっているから幸せなんじゃないかと思いました。
- 私は、幸せの国とは、東京みたいに都会でにぎやかだろうと思ったけれど、予想とは違いました。ブータンは伝統を大切にしているから幸せだと感じているのかもしれないと思いました。
- ぼくは、ブータンの人達は自分達の生活に満足しているから幸せなのだと思います。今のぼくではその暮らしには満足できないかもしれません。世界にはいろいろな暮らし方をしている人達がいることがわかりました。
- 日本はブータンとは違うところがたくさんあります。ブータンは幸せの国。でも、日本だって幸せだって言える方法はないのかな。ブータンに行って、ブータンを自分の目で見てみたいです。

3時限目：【世界で活躍する日本人について知ろう】

日本とブータンは深い関係のある国であり、たくさんの日本人がブータンで活躍しているのだということを資料や映像を用いて伝えた。

まず、道徳教材である「ブータンに日本の農業を」を読み聞かせ、西岡京治氏について説明した。そして、JICAについて説明した後、今も青年海外協力隊員やシニア海外ボランティアとしてブータンで活躍している日本人がいることを、パワーポイントを用いて写真を提示しながら説明していった。

青年海外協力隊員やシニア海外ボランティアの方々の写真を見せながら説明していると、「みんな笑顔だね。」とつぶやいた児童がいた。そこで、「なぜみんな笑顔なんだろう。活動している人達の幸せって何なのだろうね。」と問いかけ、ワークシートに考えを書かせた。

児童は、考え話し合う中で、自分のためだけに生きるのではなく、誰かの役に立つように生きていく幸せもあるのだということに気付いていった。「みんなが幸せになることが結局自分の幸せになるのではないか。」という意見も出た。これまで考えてきた幸せの捉え方がまた一步深まった場面であった。

最後に、青年海外協力隊の方のインタビュー映像を見せた。その中で「私は、はじめは開発途上国の人達に何かをしてあげるために来たと思っていました。今思うと、ブータンの人達を上から見ていたのかもしれない。でも、実際に活動してみるとその考えは間違いであることに気づき、自分が恥ずかしくなりました。ブータンの人達と共に働く中で教えてもらったことがたくさんあります。国が発展しているかどうかではなく、人間として対等に接していくことがとても大切です。」との話があった。授業冒頭に紹介した西岡氏の姿勢と共通するものがあることに児童は気付いていた。学習を通して、「幸せ」から「国際理解」、「人間理解」へと児童の思考は広がっていった。

【児童の感想より抜粋】

- 人のために何かをして、人の幸せを自分の幸せだと感じられるのはすごいことだと思う。将来、何か人の役に立てる人になりたいと思った。
- ぼくは、インタビューを聞いて、確かにそうだなと思いました。日本は豊かで偉くてブータンはかわいそう、ではなく、同じ人間として自分のもっている力を人のために使うことが大事なのだと思います。
- 「ブータン人と日本人は違うけれど、同じ地球で生きている人間だ。」という言葉がとても心に残りました。私は、ブータンだけでなく、他の国の人々も同じだということがわかりました。
- ブータンの人々は日本のことを好きだと思っているので、ぼくももっとブータンのことを知りたいです。ブータンと日本が仲良くすること、国と国が仲良くすることも幸せだと思います。

〔6〕児童・生徒の反応/変化

今回の授業を通して、児童の「幸せ」の捉え方が大きく広がっていったように思う。物質的な幸せだけでなく、心の中から生み出す幸せ、他者のために生きる幸せ、他者と共に築いていく幸せがあることに気付いていった。また、ブータンという児童にとってあまり耳にしたことのなかった国の様子を知ること、世界には様々な国があることに気づき、視野を広げることができたのも大きな収穫の一つである。授業後も、図書室で世界の国の本を探して読んだり、自主学習で他の国のことについて調べたりする姿が見られ、関心を広げることができたと感じる。

「幸せ」について考えを深めていくことが今回の大きなねらいであったが、それだけでなく、「幸せ」を一つの切り口として、児童の目を世界に向けることができたように思う。

〔7〕授業実践の成果と課題

成果としては、〔5〕に記述したように、ねらいとしていた「幸せ」に対する捉え方が深まったこと、ブータンや世界の国々への関心が高まったこと、国や人種が違って同じ人間として生きることの大切さに気付けたことなどがある。写真や映像等の資料を活用したりクイズを取り入れたりして展開したことや、グループで話し合う時間を意図的に設けたことなどが、内容への理解を促し思考を深める要因となり、このような成果に繋がったのだと考えられる。

今後熟考していく必要があると思うのは、ブータンの「幸せの国」としての側面を強調し、国の抱える現在の課題については扱わなかったことについてである。小学4年生という発達段階を考慮して、今回はブータンの幸福度が下がっていることや社会的な問題となっている点等については扱わなかった。しかし、児童の実態によってはそれらの点も扱った方が、「幸せとは」というテーマをさらに深めていくことができると考えられる。児童の実態と話し合いの深まりをよく見て、それらの内容も効果的に取り入れられたらよいと思う。

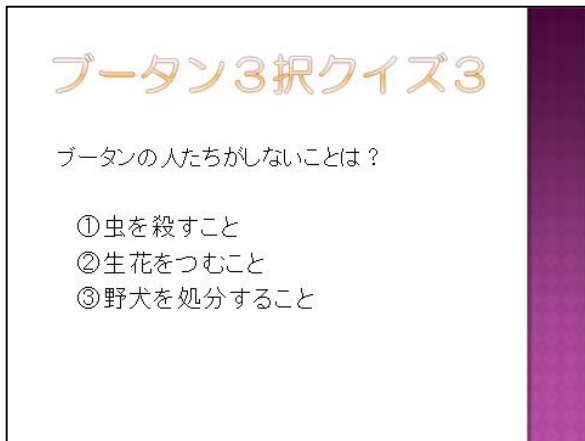
【8】参考文献(引用文献・参考資料)

- ・「ブータンに日本の農業を」 木暮正夫 光村図書「きみがいちばんひかるとき」 2013年
- ・「私たちの地球と未来『ブータン王国』」 公益財団法人愛知県国際交流協会 2012年

【9】使用教材(写真／図などの実物)

添付1 2時限目で使用したパワーポイントの一部

添付1-1 ブータン3択クイズ



添付1-2 ブータン3択クイズ答え



添付1-3 ブータンはどっちクイズ



添付1-4 ブータンの家族との思い出



【10】教師海外研修を終えて(感想・今後の展望)

教師海外研修に参加できてよかったと、授業を終え改めて感じている。自分で目で見て肌で感じた経験は、説得力のある素晴らしい教材になることを確信した。

教師海外研修では、学校現場や医療現場、一般の家庭や官公庁など様々な場所を訪問させていただき、たくさんの出会いを結ぶことができた。この経験により、私はブータンという国を多面的に見ることができるようになった。また、一緒に研修に参加したメンバーと一つ一つの経験について話し合うことで、私自身の視野が大きく広がっていくのを感じた。

経験を授業にしていけることは容易ではなく、難しいものであった。まだまだ指導が未熟で、反省すべき点の多い授業であったと思う。しかし、授業後、「先生、またブータンの授業やりたいな。」「もっと世界のことを知りたいなあ。」「私も世界で働いてみたい！」とキラキラした瞳で話しかけてきた児童の姿に、海外研修という経験のもつ「教材としての力」を感じずにはいられなかった。教師が経験を通して視野を広げていくことが、そのまま視野の広い子どもたちを育てていくことに繋がるのだと思った。

今回の経験は発達段階に合わせて、どの学年でも授業化していくことができると思う。児童の実態に応じてアレンジしながら、様々な学年で授業実践を続けていきたい。また、国際理解についてさらに学び、自分自身の視野を広げていく努力も続けていきたいと思う。